

ダーチャを楽しむB
氏の即興でのギター
弾き語り

短期集中連載③

世界から見れば、 歴史から見れば

～食・農・暮らし・協同の本質との出会い～

ダーチャですごす 豊かな週末

蔦谷栄一（農的社会デザイン研究所 代表）

今回はロシアのダーチャをとりあげます。ダーチャの利用の仕方、楽しみ方はそれぞれですが、食料のかなりの自給を可能にしており、食料安全保障の根幹をなしていると同時に、都会から離れてのんびり田舎暮らしをすることによって活力を再生しています。世界各地で見られる国民皆農の流れの中、日本版ダーチャが必要とされる時代がすでに到来しているように思われます。



国民皆農の流れ

東アジアやヨーロッパが主ではあるが、けっこう海外を歩いてきた。日本も含めてということになるが、都市住民の農業への参画が盛んになるとともに、田舎志向が強まっていることを実感させられてきた。

ドイツのクライン・ガルテンについては既によく知られているが、ドイツに限らず各国ともいわゆる市民農園があちこちにあって、週末ともなれば家族そろって農園で農作業というか畑仕事をし、まわりのやはり畑仕事に来た人たちとおしゃべりをしたり、いくつかの家族が昼食を共にしている光景はごく普通だ。またこうした露地での農業への取組みにとどまらずベランダや屋上を使って野菜等を栽培しているものも少なくない。

こうした都会で畑仕事にいそむ人が増えている一方で、田園回帰して農業をしながら田舎暮らしを楽しんでいる人たちも多い。ビジネスで成功して田舎で農場を持つのがアメリカのビジネスマンの夢だという話はよく聞かすが、むしろ

エコな生活、自給的な生活をしたという事で田舎暮らしに入っている人のほうが多いようにも感じる。

農業を行う空間・場所で区分すれば、市民農園のような都市にある農地を使っている農業参画、そして地方に田園回帰しての田舎暮らし。これに加えて都市近郊での農業参画がある。都市近郊に定着しているのが本連載の最初に取り上げたキューバであるが、二地域居住、すなわち都市近郊に小屋つきの畑(＝ダーチャ)を持って、平日は都会、週末は都市近郊という具合に行ったり来たりしているのがロシアである。

さらに台湾で実際に出くわしたのであるが、農村にあるレストランに出かけたところ、50歳前後とみられる男女7、8名のグループがにぎやかに食事をしていた。レストランのオーナーによれば、あの中何人かはマレーシアからここまで畑仕事をしに通っている人たちで、親戚の農地を借りて月に何回か飛行機で台湾まで来ており、その都度、親戚と一緒にこ

こで食事をしていく常連だという。これは東アジアと東南アジアの境目での話であるが、これに限らず国をまたいで都市住民の農業参画も出現してきているようだ。

このように都市住民の多くが、程度の差はありながらも多少なりとも農業に参画する国民皆農の流れは着実に広がりつつある。日本では都市農地については長らく都市計画法によって規定され、よって農地としては認められてこなかったという特殊事情を抱えてきた。日本に限らず各国ともそれぞれに条件・環境を異にしてはいるが、国民皆農は押しとどめることができない流れになっているように思われる。今回はこうした中からロシアのダーチャを取り上げてみたい。

ダーチャでの自給が食料安全保障のベース

ロシアでは都市住民の多くはダーチャと呼ばれる小屋つきの畑を持っている。600㎡が標準とされ、ここに食事や寝泊まりができるような小屋というか住宅が建てられている。中にはお屋敷に近い

立派な建物もあるが、総じて簡易な建物が多い。

都市住民の約6割がダーチャを持っているといわれ、都市近郊とはいえ行き来が難しい人や農業が嫌いな人、また金持ちはダーチャではなく別荘を持っている



たくさんの花が咲き乱れるリュウダさんのダーチャ





A氏の家族と一緒に記念写真。
右から2人目が筆者

つたや・えいいち

農的デザイン研究所 代表
1948年生まれ。71年農林中央
金庫勤務。(株)農林中金総合研究
所・常務取締役、特別理事を経て
2013年11月から現職。主な著書
は『農的社會をひらく』『共生と提
携のコミュニティ農業へ』『都市農
業を守る』『日本農業のグランドデ
ザイン』等。

人も少なくなく、これらを差し引きすれば希望する人のかなりはダーチャを持っているということになる。とにかく金曜日の夕方と日曜の夕方はダーチャと行き来する人たちの車で道路は大変な渋滞となる。この並ではない渋滞をもっともせず毎週末のようにダーチャに通うロシアの都市住民のダーチャに寄せる熱き思いには、尊敬に近いようなものを感じてしまう。

このダーチャでは農産物が生産されるだけでなく、花が植えられたり、芝生にしているところもある。総じて食料事情がよくなった昨今は自給用の野菜と花を中心に行っているところが多い。ソ連崩壊後の混乱期には食料品店の前に食料を求める人たちが、それこそ長蛇の列を作っている様子が報道されたが、この食料危機を乗り切ることができたのは、都市住民がダーチャで主食であるジャガイモの9割以上を生産したからだとされている。やはり第二次大戦後の食料難の際もダーチャが大きな役割を果たしたことが報告されている。今でもジャガイモの77.6%、その他野菜の67%がダーチャで作られている(2015年。ロシア国家

統計局調査)。すなわちロシアの食料安全保障の^{とりで}砦となっているのがダーチャであり、都市住民による自給が食料安全保障のベースとなっているのである。

ダーチャは帝政ロシア時代に貴族が郊外に別荘を建てたことに端を発するが、ソ連時代に大きく広がったとされる。ソ連時代には重工業の推進のため農村から都会へたくさんの労働力が移動することとなったが、次第に元気を失ってしまう労働者が多かったとか。これは農村から遠ざかり畑仕事にも縁がなくなってしまったところに原因があるのではないか、ということ労働者に土地をあげてダーチャを作らせたところ、労働者は元気を取り戻した。そこで成果をあげた労働者には土地をあげるといふことで、ダーチャの大々的な導入が図られることになった、という話を聞かされたことがある。ロシア人は特に、ということであろうが、やはり農業に触れ、畑仕事、百姓仕事をすることが、人間をリラックスさせ、人間性を回復させるとともに労働意欲の喚起にもつながるといふことなのであろう。

このダーチャの600㎡という広さは一定程度の自給を想定したものであること、またダーチャは都市から100km以上離れたところを基本としているのは、広島・長崎に落とされた原爆の教訓によるとの報告もある(豊田菜穂子「ロシア 菜園つきセカンドハウス=『ダーチャ』のある暮らし」)。

ダーチャは数十軒、あるいは百軒、二百軒と団地として作られており、土地をもらった人たちが共同してインフラを整備してきたもので、それぞれに組合が作られてもいる。これもあって隣近所との交流・コミュニケーションは良好だとされる。

事例① リューダさんのダーチャ (サンクトペテルブルク郊外)

ロシアの西北端近く、サンクトペテルブルクの郊外にあるセルゲワ・リューダさん夫妻のダーチャである。数十戸のダーチャが並ぶ中の一つで、普通の倍の1,200㎡の広さを持つ。ご主人はシベリアでの鉄道敷設にずいぶんと貢献したそうで、1987~88年のダーチャ・キャンペーンの際に取得した。電気以外は道路から水道まで



A氏のダーチャがある団地の全容（実は、この写真を撮るためにシャッターを切った途端、隣のダーチャの飼い犬にお尻を噛まれてしまったため狂犬病予防の注射を受け、3か月禁酒を余儀なくされるハメに）

すべて、一緒に団地に入った人たちで整備したという。

リュウダさん夫妻のダーチャを訪れたのは夏であったが、バラ、アネモネ、ワレモコウ、マリーゴールド、オイランソウをはじめとして三十数種類もの花がまさに咲き乱れていた。以前は野菜を中心に栽培していたそうであるが、もともと花が大好きだとかで、今は花を中心にして、若干の野菜とイチゴ、バジル等のハーブを作っている。

リュウダさんは毎週末、ダーチャに足を運ぶが、ほとんど一人で来るそうで、サンクトペテルブルクから電車に乗って最寄りの駅で降り、駅からは1時間弱歩くといい。灌木が生えた中を通る道かんぼくを歩くが、駅からダーチャまでは人気のないところで、熊でも出たらどうするのだろうかと思わず心配してしまう。ダーチャでの農作業をする楽しみが、そうした心配をも吹き飛ばしてしまうということなのであろうか。

事例② A氏のダーチャ (モスクワ郊外)

モスクワの空港から車で約1時間。空港への飛行機到着が夜10時ごろで、荷物を受け取ってから車で出発。ちょうど月の明かりもなく、空港から離れるほどに漆黒の暗闇の中を走って、夜中の12時過ぎにA氏のダーチャに到着。A氏夫妻は起きて待っていてくれた。軽食をつまみながら、早速にウォッカで乾杯。おかげでぐっすり就寝。

A氏は50歳前後。著名なジャーナリストであるが、夏を中心とする気候のいい間は、ダーチャに寝泊まりし、電車を利用して都心に通う。たいていのダーチャは冬は寒いことから空家にして、もっぱら都会ですごす人が多いが、中にはしっかりと暖房がきく家にして、一年中ダーチャで暮らす人も若干はいるという。

A氏のダーチャの隣にはA氏のお母さんのダーチャが続いてあり、垣根は設けずに自由に行き来がで

きるようにしてある。A氏夫妻と娘さん2人にお母さんも加わって、いつも三世代一緒になっての食事。お母さんは70歳代に見えるが、孫と一緒に畑仕事をするのが一番の楽しみだそうだ。

事例③ B氏のダーチャ (モスクワ郊外)

A氏のダーチャから約1時間、都心までは2時間弱のところにB氏のダーチャがある。B氏夫妻とB氏のお母さんの3人でダーチャを使用しているが、畑仕事はもっぱらお母さんで、少量多品種で野菜や花を作っている。収穫した農産物はとうてい消費できないことから、酔潰けの瓶詰にし、お客がくれば瓶詰を持ち帰ってもらうのを常に行っている。

B氏は畑仕事よりもギターと歌が大好きで、時間さえあればギターを弾きながら歌を歌っているらしい。B氏に限らずロシア人は歌好き、森好きが多いようで、夏になると仲間たちと食料とギター



(B氏のダーチャ) 取れたての野菜での昼食

を持って森に入り、森の中で数日をすごすという。B氏の演奏をずいぶんと聴かせてもらったが、たいていは即興で、その時に浮かんだ詩にギターで曲をつけ歌ってしまう。完全にセミプロレベルで、ロシアの高い音楽水準に感心させられたが、これも豊かな森の存在を背景に、森と一体となった暮らしが生み出してきた文化でもあるように感じた。

日本版ダーチャで働き方改革

上の事例が示しているように、ダーチャの利用の仕方、楽しみ方はそれぞれであるが、食料のかな

りの自給を可能にしており、食料安全保障の根幹をなしていると同時に、都会から離れてのんびり田舎暮らしをすることによって活力を再生している。

日本でも市民農園・体験農園、あるいは農村での定年帰農、田園回帰等により、農業なり農村を楽しむ人たちが増えてきてはいるが、一方で耕作放棄地や空家も多く過疎化、限界集落化が進行しているところも多いのが現実である。

土地が半ば無限にあるロシアと異なり、日本で都市郊外にダーチャ的に二地域居住を展開していくことは難しい。逆に日本は都市

と農村との物理的な距離が近く、また高速道路をはじめとするインフラ整備が進んでおり、都市と農村との時間距離は短い。

環境・情勢は、食料も含めた安全保障の強化が注目されつつあると同時に、地方創生、働き方改革を求めている。耕作放棄地対策や空家対策も含めて、二地域居住によって都市人口を農村に本格的に還流させていくことを検討・推進していくことも大きな課題だ。ロシアのように世帯ごとにダーチャを持つだけでなく、民家を再生し、シェアしてこれを利用し、あわせて集団化して農地の管理等も行っていくのが日本人にはなじみやすいかもしれない。国民皆農の流れの中、日本版ダーチャが必要とされる時代が既に到来しているように思う。

<参考文献>

豊田菜穂子 (2017)「ロシア 菜園つきセカンドハウス=『ダーチャ』のある暮らし」『世界の田園回帰』(シリーズ田園回帰 第8巻) 農山漁村文化協会
高谷栄一 (2013)「共生と提携のコミュニティ農業へ」創森社

JA年史、自費出版のお手伝いをします。

■JA年史づくり

周年記念に行うJA年史編纂やイベント開催は、地域にJA活動を広げる絶好の機会です。

JA年史制作には準備を含めて長い期間がかかり、編纂に当たっては独特のノウハウも必要です。

資料収集、原稿執筆、造本など、JA年史を30年来制作してきた当社にご相談ください。

■自費出版

自叙伝、旅行記、詩集、写真集などの作品を「本」にまとめてみませんか。お気軽にご相談ください。

■案内書をお送りします。

下記までご連絡ください。

当社ホームページでもご案内をしています。

<http://ienohikariss.co.jp>

(株)家の光出版総合サービス 制作事業部

〒162-0826 東京都新宿区市谷船河原町11 飯田橋レインボービル6F

TEL03-5261-2302

FAX03-5261-2307